

山と博物館

第37巻 第4号 1992年4月25日

大町山岳博物館



春を待つサル 写真と文 倉科恵一

サル類は、一般に熱帯地方に生息していますが、ニホンザルは雪の中でも平気でくらしているサルとして有名です。

北海道をのぞく日本全国に広く分布して生息しており、その数はおよそ四万〜五万頭。たいがい群れをなして行動し、その大きさは普通二十〜百五十頭くらいで、大きくなると分裂して新しい群れを作ります。

雑食性で、くだもの、木の芽、葉、皮、昆虫などを好んで食べますが、最近では里へ降りて来て農作物を食い荒す事も多くなっています。森林開発による自然破壊のため、サル達は安住の地を失ってしまったのかも知れません。大町周辺でも、最近では我々のごく身近でニホンザルの群れを見る事ができます。

先日、木の上でのんびりしているサルに遭遇しました。長かった冬に耐えて、春の到来を待ちわびているのでしょうか？

私が写真を撮るようになったのは、北アルプスの山々のすばらしさと、朝夕の変化の妙に感動してからです。レンズで見た風景と、写真にした風景との微妙な違いが何とも言えない魅力です。休日には、夢中で野山を歩きまわったり、自然の中に生きる昆虫や山野草を撮りながら、自分なりにその不思議な静止画の世界を楽しんでいます。

これからも自然を愛し、すばらしい風景がひとつでも失われないことを願いつつ、写真を撮り続けていきたいと思っています。

(大町市在住)

写真展

「時の風物誌」によせて

川口 邦雄

このたび大町山岳博物館で写真展をさせて戴くことになりました。私が信州に山や自然のすばらしさを体験してから考えてみると半世紀近くになるでしょうか。いわば私の第二のふるさとというべき信州で個展ができることは非常に幸せです。

今回の写真展は私の日本・世界自然の聖地巡礼ともいうべき地球紀行の中から、我々のせた地球が宇宙の中で歩んでゆく「時」というものをキーワードにしてとりあげた、風物誌、地球の紋事詩、ジオボエジーの作品です。

この要旨は写真展の目録あいきつ文に述べましたが、つまり山や自然を時間の目で洞察してみることによって、それらの山や自然を体験した人、一人ひとりなりの独特な考えが生れることを期待するもの、といえますでしょうか。

すなわち、自然をみる心の窓ガラスふき、の役にいきさかでも立てば作者の願いは大分かなえられたと思う次第です。

★出品作品より解説余録

①「派手好みの独立峯」より「八雲立つマッターホルン」

独立峯は象徴的に特徴ある雲がいろいろと出やすいので、その意味でも写真愛好家には人気がある。ここには一つの山に三種の雲がみえている。



①八雲立つマッターホルン

②「地底よりのプレゼント」より「那須茶臼岳の火山弾」

この火山弾はかなり巨大で、高さは大人の背丈ほどもある。こんなものが火口から吹き上げられてここに落ちたエネルギーを想像すると、地球の「底力」を実感する。

③「失われた時への旅」より「スプリットマウンテンと現われたモリソン層」

モリソン層とはコロラド州デンバーの郊外モリソン市に一八七七年発見された中生代の恐竜化石の露頭で、その後の調査で北アメリカに広くこの層が分布していることがわかった。写真の正面のゴツゴツしたところがモリソン層の、大昔の川底が褶曲して隆起したところ。ここから恐竜や貝類、珪化木などの化石

石がたくさん出土する。遠景の山がスプリットマウンテン。

④「失われた時への旅」より「ブライスキヤニオン俯瞰」

この谷の下部は中生代、上部は新生代の地層で、浸食に対して強い岩が上部、つまりキャブロックになっているため浸食の影響は下部に大きく、このように異様な景観となった。

⑤「失われた時への旅」より「朝のグラランドキャニオン」

その谷底は二十億年の前の岩層。地表は古生代末期二億七千万年前の地層を現わしている。途中に二つの不整合があるが、グラランドキャニオンは、地球自然のカレンダーそのものである。

★信州に恐竜はいたか？(信州の中生代)

写真展ではアメリカ西部、ユタ州コロラド州の恐竜化石が大変多く出土する中生代が露出している土地を見廻りましたが、同じ頃、



②那須茶臼岳の火山弾



③スプリットマウンテンと現われたモリソン層

今からおよそ二億四七〇〇万年前〜六五〇〇万年前の日本、それも信州に恐竜はいたでしょうか？

大町山岳博物館で発行しているこの「山と博物館」のバックナンバーを、テーマ別にまとめて三巻とした山岳博物館二十周年記念出版「北アルプス博物誌II」の中の、地学の部に信州の中生代について述べられていることを参照してみてください……。

太田昌秀氏(ノルウエー国立極地研究所研究員)は、

……中生代中ごろになると、北アルプス地域は浅い海におおわれるようになります。この海には、アンモン貝などがすみ、岸边にはたくさんシダ植物が茂り、小形の恐竜などが散歩していました……。

(P 224 第7巻第8号62・8)
そして平林照雄氏(岩村田高校教頭・元大

町山岳博物館学芸員)は「郷土の地質」の中

で、……古生代の次の中生代には、日本は大陸の海岸の部分に位置していた。そしていくつ

の大きな入江があり、それぞれが特徴のある地層を堆積した。そのうち有名なものに来馬層がある。(中略)来馬層の中には一億五千万年も昔のワラビ・ゼンマイ・トクサ・ソテツ・イチヨウや四センチ大のシジミ貝の立派な化石が沢山はいつている。

植物化石の多い部分は無煙炭になっており、戦前は土沢出口に光明炭鉱があった。この時代は例の恐竜やアンモナイトが栄え、被子植物はなく、シダ植物の大き木が繁茂していたと考えられ、羽の長さが一メートルもあるトンボがすんでいたという……。 (P243第10巻第10号・第11巻第3号65・10・66・3)と述べています。

さて、ここにすでに恐竜の文字があらわれているので、信濃ザウルス(?)の存在は明らかになようですが、当時、信州がどのような環境にあったかも、おぼろげながらイメージがわいてきたことでしょう。(なおスペースの関係で、各筆者の長文にわたる引用ができませんでしたが、くわしくはぜひ日本の記述を参照してください。)



④ブライスカanyon俯瞰

地球の向うとこつちで離れているのにどうして環境が似ていたのか、というわけですが、中生代当時、つまり今から二億年ほど前は、まだ地球はパンゲアという超大陸が一つの陸地をなしていた頃で、植物化石の出土状況からみると気候は現在では信じられないほど世界的に均一で、その上かなり気温湿度が高かったのです。

これはパンゲアの中にこれといって高い山々がなく、その大陸が圧倒的に広い海に囲まれていたからだろうと考えられています。気温が高く湿度が高いということは、シダ植物などの繁栄につながるほか、いつも豪雨、大洪水がおこって恐竜などの生物たちの生活をおびやかしていただろうとも想像されます。

アメリカ西部の中生代の頃はこのような豪雨洪水のために遭難した恐竜たちが、当時の大河の中州に漂着し、積み重なった状態で化石になっていたの化石層が発見されていますが、ここ信濃の国も地層の状態から、同様な環境にあったことは充分想像されることです。

しかし、当時は前述のように地球はまだパンゲアという超大陸の頃で、二億年ほど前以降、それが分裂移動したとされているので、



⑤朝のグランドキャニオン

現在のここ信濃大町が、または日本が今の地球緯度上のところに正しく位置していたか、いないかというところは全くわかりません。ただ、地殻の一点としてこの土地に中生代の地層があり、そこに恐竜が住んでいただろうということはたしかなことなのです。

いずれにせよ、恐竜は地球の中生代に地上最大の生態系を持っていた爬虫類ですが、ある時代に絶滅してしまいました。この原因についていろいろな説があるのですが、八年ほど前、アルパレス博士の「巨大隕石衝突説」が発表されて、原因の解明がかなり現実性をおびてきました。すでにご存知の方もおられるでしょうが、直径十キロメートルほどの小天体といわれるほどの隕石が地球に衝突したために異常気候となり、かなりの生物が絶滅しました。当然恐竜もその影響を受けた。というものです。

しかし、絶滅といつてもかなりの期間があるのです。地層に現われた隕石衝突と思われる影響の後の数万年あとも、恐竜の五属十一種の骨化石、あしあと、卵などが発見されているし、アンモナイトなどは衝突以前に絶滅している。それから、巨大隕石が落下すれば、当然大地震、大津波がおこり、大礫層が生じサンゴなどの生物は当然絶滅するはずなのに生き残っている。……などの疑問もあ

るのです……。まあ、恐竜自体にしても化石からは生理的なことはよくわからないし、それに第一、雄か雌かも化石からはわからないということなのです。

この信州に、これからも恐竜の遺物・遺跡が発見されるなら、これらの恐竜の秘密も、案外日本の信州あたりから新しい解明のい

とぐちがつかみ出されるのではないのでしょうか。(自然科学写真協会理事)



中生代恐竜の化石、信州の地層に発見

道祖神の話

金田国武

道祖神(どうろくじん)はおん馬鹿だ

家(えさ)の焼けたも知らなで

夜も昼間も兄妹(きょうまい)同志で

かかさの××丸焼けた ワーイワーイワー

イ ワーイ

一月四日の晩、子供たちは御幣(おんべ)

焼きの燃え上る火の粉に向って、この日ばかりは歌える卑猥な童唄で囃し立てるのである

が、この唄にもある通り、安曇平では道祖神

さまは兄妹神だと語り伝えられている。

昔々そのまた昔に……

昔々そのまた昔に……

俺あ方の村に年頃の兄と妹がおっただそう
な。近所の衆は、兄(にい)やには早くいい
嫁さまを、妹(ねえ)やにはいい婿さまをと
しきりにすすめるのだが、何だ彼だと言っ
てみんなことわってしまうので、あの二人はど
うもおかしいぞ、兄妹で夫婦(めおと)にな



大町市高根町

道祖神さまは村の四辻にさらされ、絶対不可侵の戒めと、大きな罪を背負っているせいか、強烈に人間味があって親しみやすく、何でも庶民の願いごとを聞き届けてくれる神さまである。縁結びや病氣退散はもとより、お

戒めと庶民の願いごとを

「何と、それは畜生にも等しい行為じゃ。見せしめのため厳罰に処せ」とお達しが出て、その日のうちに二人は荒縄で結わえられ、村の四辻へさらされた。そうして三日目の晩には二人の家も焼き払われてしまったのだ。うな。

聖(たぐ)る朝近所の衆が、「何ともかわいそうなことをしてしまったのう」と、雪の中から二人を掘り出してみると、何と二人は頬をびったりとくっつけ、とても倅せそうにほほえんで、石像の神さまになっているではないか……。以来この村へは疫病神や貧乏神が入ってきて、この倅せそうな夫婦神さまに当てられて、ほうほうの退散したのである。

っているじゃないかと言われるようになり、そう言えば一緒にお風呂へ入っているところを見たとか、妹の膝枕で眠っていたとかそんな噂が立って、噂はだんだん大きくなって、ついついお城の殿さまの耳へ入ってしまったと。

蚤さまや稲の豊作を願ったり、安産や子供の寝小便のしまつまで聞き届けて下さる村の衆みんなの神さまである。



大町市平源汲

わが子の躰はわが手で

旧常盤村(現大町市大字常盤)役場の明治一四年(一八八一)の資料、「常盤村の識字率調査」によると、回答者八八二名のうち、手紙や証書を自筆できる者三九名、公布達や新聞論説を解説できる者が一五名、姓名、村名を全く読み書きできない者が三二二名で三五パーセントとなっている。村民二五〇七名のうちこの回答者はほとんどが男性であるので、全体的にはその識字率は今考える以上に低かったと思われる。またそれ以前の江戸時代においては、ほとんどゼロに近い数字であったと思われる。

さて、そんな時代の教育はどうなっていたのであろうか。

柳田国男は、「昔話覚書」の中で、「これだけは是非とも大きくなるまでの間に覚えさせておかなければならないということが、昔の

社会には仲々多かつた」と言い、その方法として昔話をあげている。また娯楽や笑いとしての童話を安易に語ることを強く戒めている。

今と違って、「自分の子供の躰は自分の手で」と皆が意識し、長幼による子供の力を含めた地域全体の中で、正しい流れに子供たちは乗せられていった。

その方法と手段はとりどりだが、「道祖神」にまつわる話など、この地方に伝わる豊富な昔話をくり返しくり返し聞かせる中で、無意識のうちに子供たちは、これだけは知って置かねばならない大事なことを、血肉のように身につけていったのだ。

(大町市在住)

友の会だより

平成四年度主な行事予定

- 居谷里湿原自然観察会 4月26日
- 小鳥の声を聞く会 5月9・10日
- 針ノ木雪溪を訪ねる会 6月14日
- 木曾路博物館めぐり 7月12日
- 鹿島槍登山 8月29・30日
- キノコ学習会 9月27日
- 黒部溪谷探勝会 10月17・18日
- 鎌ノ峰 秋の自然観察会 10月25日
- そば打ち講習会 11月15日
- 歩くスキーの会 2月7日

詳しくは博物館内友の会事務局へ。

山と博物館第37巻第4号

発行所 長野県大町市 TEL 0261-2211

印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館

定価 年額 1,130円(送料共) 切手不可

郵便振替口座番号(長野四一)三三三三三

大糸タイムス印刷部